

マクロ経済学 第8回 解答解説

A1. ○ (🔗 VテキストP342～343) 古典派の二分法・貨幣の中立性が成り立つ。
A2. × (🔗 VテキストP344) これらは互いに他の逆数だから、正の相関はない。
A3. × (🔗 VテキストP350～351) ケインズ型は短期消費関数を表す。これに対して、クズネッツは長期において平均消費性向が所得に関係なく（ほぼ）一定であることを発見した。
A4. × (🔗 VテキストP354) フリードマンの恒常所得仮説は、消費が恒常所得によって決まることを示すものである。
A5. × (🔗 VテキストP356) 相対所得仮説はデューゼンベリーによる。
A6. ○ (🔗 VテキストP356)
A7. ○ (🔗 VテキストP352～353) なお、引退期には所得がないので、それまでに蓄えた貯蓄や資産を使って年間240万円ずつ消費する。